

エッセイ

北の大地より さっぼろ時計台通信 (24)



札幌医科大学医学部 遺伝医学 教授
札幌医科大学附属病院 遺伝子診療室 室長
櫻井 晃洋



「コンパニオン」

皆さんは「コンパニオン」という言葉から何を想像しますか。やはりパーティーなどでお世話をしてくれる若い（若くなくてもいいですが）女性でしょうか。日本では確かにそういう人たちをコンパニオンと呼んでいます。でももともと英語にはそのような意味はなく、彼女たちはホステスとかアテンダントと呼ばれます。英語の companion とは一緒に伴うものを表現するのに使われ、たとえば併用薬はコンパニオンドラッグと言いますし、日本でガイドブックと呼ばれるものはあちらではコンパニオンブックです。

前置きが長くなりましたが、今年の6月に日本で初めて「コンパニオン診断」が必要な薬が保険適用になりました。この薬は再発や転移をした乳がん患者さんに処方するものですが、その処方には遺伝性乳がん卵巣がんの原因遺伝子に病的な変異があることという条件がついています。この遺伝子は、以前アンジェリーナ・ジョリーさんも検査を受けて、結果をもとにまだがんができていない乳房や卵巣を手術で取り除いたことを告白したために大きな話題になりました。つまり、この薬を乳がん患者さんに処方するには遺伝子を調べる必要があります、そのためこうした検査を「コンパニオン検査」あるいは「コンパニオン診断」と呼んでいます（ちなみに今回の薬は、卵巣がんに対しては遺伝子の情報なしでも使うことができます）。

進行乳がんの患者さんがこの検査を受けて、結果が陽性であれば、期待している薬の処方を受けることができますが、同時に家族のこと、たとえばお子さんが同じようにがんになりやすい遺伝的な体質を受け継いでいるかもしれない、という問題に向き合う必要が出てきます。検査が陰性であれば、家族への遺伝のことは心配する必要はないですが、期待していた薬は使えませ

るので、これも患者さんにとっては期待に添わないことです。どちらの結果になっても患者さんにとってはさまざまな思いを抱くことになる検査です。また、病院や薬局などで、医師や看護師、薬剤師が乳がんの患者さんにこの薬の説明をする場合、それだけでその患者さんが遺伝性の乳がんとわかってしまいますので、薬の説明ひとつもプライバシーを守れる場所で行う必要があります。

これまでは遺伝の病気は家族に病気の人が多いことから疑われたり気づかれたりすることが多かったですが、今回の検査のように遺伝性の病気らしくはないけれども検査をして、その結果遺伝的な体質がわかるという状況がこれからどんどん増えてくると思います。医療の現場ではこうした検査への対応に悩んでいる部分もありますが、遺伝の病気は特別なものではない、ということも多くの人を知る機会にもなるのではないかと考えています。

「ママチャリ耐久リレー」

6月の最後の日曜日に、札幌市ではモエレ沼公園というところで「ママチャリ耐久リレー」が行われます。これは1チーム10人以内で、一周約4キロのコースを延々4時間リレーするというもので、約300チームが参加する大イベントです。今年はこちらの研究室も参加することになり、最近は一週1回外来のお手伝いに通っている病院へも往復20キロを自転車で行き来しています。皆さんがこの「せせらぎ」を手にする頃はすでにレースは終わっているのでしょうか。私としてはレース後のビールのほうが今から楽しみです。

